

## 第66回日本小児保健協会学術集会 イブニングセミナー

2020 幼児健康度調査の50年～子どもとともに50年～

## 小児保健における幼児健康度調査の意義

秋山 千枝子 (日本小児保健協会会長)

## I. はじめに

昭和55年より、厚生労働省は全国的に乳幼児の身体発育の状態を調査し、わが国の乳幼児の身体発育値および発育曲線を明らかにし、乳幼児保健指導の改善に資することを目的として、「乳幼児身体発育調査」<sup>1)</sup>を10年周期に行っている。その調査内容は、生年月日、体重、身長、胸囲、頭囲、運動・言語機能、栄養法、母の状況等である。

公益社団法人日本小児保健協会（以下、当協会）は、厚生労働省が実施した「乳幼児身体発育調査」と併せて、幼児の心身にわたる健康や日常生活および発達状態の実態を把握し、乳幼児健康診査、保健指導、育児相談に役立てることを目的に、「幼児健康度調査」を実施している。「幼児健康度」は、昭和55年の第1回調査から継続して用いている発育・発達する幼児期の子どもの健康の度合いを示す総括的概念である。

当協会には、「乳幼児身体発育調査」<sup>2)</sup>を詳細に分析解説する発育委員会と「幼児健康度調査」を担当する幼児健康度調査委員会の2つがある。

## II. 「幼児健康度調査」実施方法

本調査は厚生労働省の指導のもとに、各都道府県・政令市・特別区および各市町村の格別なご協力を得て実施されており、本調査は乳幼児身体発育調査と対象を同じくしている。初回の調査は昭和55年度（15,045人）、次いで平成2年度（9,500人）、平成12年度（7,364人）、平成22年度（5,352人）に行われ、次回は令和2年度に調査される予定である。調査内容は表に示す。調査方法は、「乳幼児身体発育調査」の会場において、保護者に調査票を配布し、待ち時間などを利用して記

入してもらうアンケート方式により行い、調査会場において調査票の記入が終了しない保護者がいる場合には、返信用封筒を渡し、記入後郵送により回収した。

## III. 30年間の比較研究結果

平成22年度厚生労働科学研究事業「幼児健康度に関する継続的比較研究」（研究代表者：日本小児保健協会会長 衛藤 隆）<sup>3)</sup>において、昭和55年、平成2年、平成12年、平成22年の比較研究が行われ、次のような変化の特徴が報告されている。

1. 子どもを預けている割合は、1～2歳児で倍増、3歳児以上で1.3～1.5倍に増加。
2. 母親が子どもとゆっくり過ごせる時間は平成12年に一度減ったものの回復傾向。
3. 子どもとよく遊んだり、母親の支えになっている父親の割合は増加。

表 幼児健康度調査の内容

1) 家庭環境	両親の年齢、祖父母の同居、きょうだい、保護者の職業、居住環境
2) 育児環境	保育の状況、母親の就労
3) 両親の心身の健康状態と育児の関わり	母親の心身状態・育児不安、父親の心身状態、家事・育児
4) 妊娠・出産に関する快適さ	
5) 子どもの健康と生活	健康診査と受診の感想、予防接種、感染症の罹患状況、急病と小児救急体制、けがおよび事故、かかりつけの医師、歯科受診、育児の相談相手、食生活、睡眠・生活リズム、テレビ・ビデオ視聴、気になるくせ、友だち・遊び・遊べる場所、習い事、生活習慣
6) 発達	調査項目について

4. 妊娠・出産に対する母親の満足度は高くなっていた。
5. 10年前の調査では夜型の傾向が強くみられたが、夜型の子どもの生活は改善傾向。
6. 自転車・三輪車で遊びが減少し、テレビ・ビデオは増加。テレビゲームの時間は減少。
7. 排尿や歯磨きなど基本的な生活習慣のしつけや自立は遅くなってきている。

IV. 「幼児健康度調査」の意義

1. わが国の幼児に関する経時的な実態調査である

昭和55年の第1回調査から毎回同じ質問項目を継続している。例えば「お子さんをどこかに預けていますか。または家族以外の人に面倒をみてもらっていますか」(図1)で子どもを預けている割合は、1~2歳児で倍増、3歳児以上で1.3~1.5倍に増加していることがわかり、これらは時代の変化や幼児の実態を明らかにする重要な調査といえる。

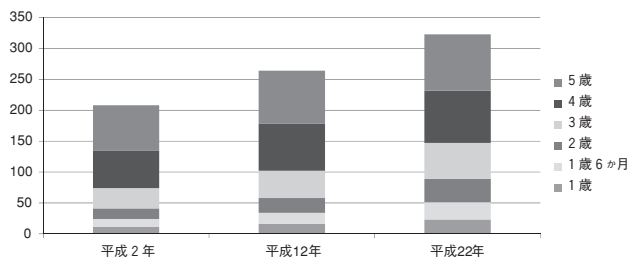


図1 お子さんをどこかに預けていますか。または家族以外の人に面倒をみてもらっていますか

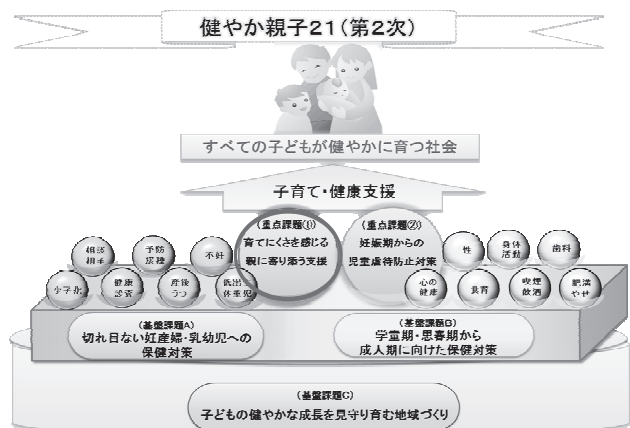


図2 「健やか親子21(第2次)」(平成27年度から平成36年度まで)

重点課題①: 育てにくさを感じる親に寄り添う支援  
 指標番号: 1 指標の種類: 健康水準の指標  
 指標名: ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合

2. 健やか親子21の指標へベースライン等を提供している  
 平成13年度より始まった「健やか親子21」<sup>4)</sup>は20世紀の母子保健の取り組みの成果を踏まえ、残された課題と新たな課題を整理するとともに、課題それぞれについての目標を設定することにより、関係者・関係機関、団体が一体となって取り組みを推進する国民運動計画である。そのため、目標値を設定するためのベースラインが必要であり、幼児健康度調査結果がベースラインとして活用されている。例えば、「健やか親子21」の「課題4:子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」の保健医療水準の指標は「ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合」で、そのベースラインは平成12年度幼児健康度調査結果68.0%が使用された。「健やか親子21」平成22年最終評価は75.8%で「変わらない」であったため、「健やか親子21(第2次)」<sup>5)</sup>では「重点課題①:育てにくさを感じる親に寄り添う支援」の指標に再度「ゆったりとした気分で子どもと過ごせる時間がある母親の割合」が掲げられている(図2)。

3. 幼児に関する新たな課題を提供することができる

経時的な調査を行うことによって、その時代における幼児に関する新たな課題が明らかになる。例えば「お父さんはお子さんとよく遊んでいますか」、「お父さんはあなた(お母さん)の相談相手、精神的な支えになっていますか」の質問で、子どもとよく遊んだり、母親の支えになっている父親の割合は増加しているが、「お父さんは育児をしていますか」の質問から、父親が参加する育児の内容について、「子どもとの関わり方や父親自身の満足度等にも着目した、より充実したものであることが望まれる」と内容を深めている。また「お父さんの気持ちやからだの調子はいかがですか」の質問で、父親の「心身ともに快調」が減少し、「心身と

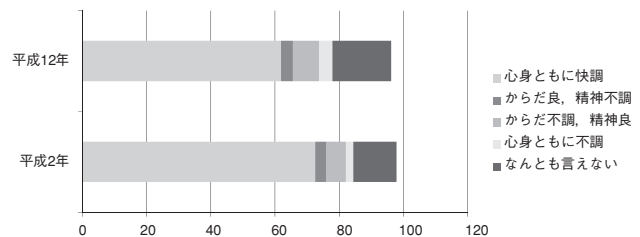


図3 幼児健康度調査(平成2年度, 平成12年度) お父さんの気持ちやからだの調子はいかがですか

もに不調」が倍増していることを明らかにしている(図3)。このことは、「健やか親子21(第2次)中間評価に関する検討会報告書」<sup>6)</sup>で「父親の育児への取り組み状況は大きく変化している一方で、父親の心身の健康の実態については十分に把握されていない」と今後に向けて検討が必要な項目としてまとめられている。

## V. ま と め

小児保健における「幼児健康度調査」の意義は、前述したように、①わが国の幼児に関する経時的な実態調査、②健やか親子21の指標へベースライン等の提供、③幼児に関する新たな課題の提供である。さらに、「乳幼児身体発育調査」や「健やか親子21(第2次)」とともに、小児保健に関する調査の「三本柱の一つ」であるといえるのではないだろうか。次回の第5回調査は令和2年と目前であり、関係諸氏のご協力をお願いしたい。

## 文 献

- 1) 厚生労働省“乳幼児身体発育調査” <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001tmct-att/2r9852000001tmea.pdf>
- 2) 加藤則子, 瀧本秀美, 横山徹爾. 平成22年乳幼児身体発育調査結果について. 小児保健研究 2012; 71(5): 671-680.
- 3) 衛藤 隆. 幼児健康度に関する継続的比較研究: 平成22年度総括・分担研究報告書. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業. [http://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010\\_kenkochousa.pdf](http://www.jschild.or.jp/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf)
- 4) 健やか親子21. <http://sukoyaka21.jp/>
- 5) 健やか親子21(第2次). <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000067539.pdf>
- 6) 第3回「健やか親子21(第2次)」の中間評価等に関する検討会報告書. [www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_06468.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_06468.html)